

# 小説

井上 次雄  
杉山 啓志  
選

特選

## 「山の湯」の女

野瀬 町

水 沢 郁

今は彦根市中央町となっているが、そのあたりは土橋町どばしと言った。城の外濠を横断するための細い土手道の名残りだろう。かつて隆盛をきわめた銀座商店街の勝手口みたいところだ。

近くには彦劇げんげきや協映きょうえい、ちよつと離れてセントラル劇場などという映画館もあって、昭和三十年代、マルビシ百貨店のあった銀座は湖東地域の住民にはあこがれの的で、勤労感謝の日の頃の「多びす講」大売出しなど、氷雨の降った年でも、それこそ芋の子を洗うような人出で賑わった。

私が高校生の頃、マルビシはどうになくな

っていたが、芹川せりがわから内濠にかけて彦根の市街地には高校が四つあって、私も三年間市街地を往復していた。しかし、銀座のど真ん中のすぐ裏に「山の湯」という風呂屋や、気風きぶのいい姐あねさん風情の弁天堂があることをすっかり忘れていた。

私は最近、ある郷土史家の方から明治維新の彦根草創期の人物群像を教えられ、任侠の親分が、彦根では草分け的存在のキリスト教布教者に感化され、この土橋で「山の湯」という薬湯くすりゆを始めたということを知った。それまで経営していた袋町ふくろまちの遊郭を廃し、失業した高齢者たちに職を与えるためでもあったということだった。

私はその美談めいた話に心を動かされはしたが、まず土橋の風呂屋と聞いて、古井戸から急に湧水が出てきたように、昔祖父から聞いた話がよみがえってきた。

それと相前後して、ここがびわ湖ビエンナーレの会場の一つになることも、つい先日、

新聞の地方版で知った。

これは一度訪れてみなければなるまいと思

った。山の湯にのれんは掛かっていたいなかった。私は数あるビエンナーレ会場の下見も兼ねて、まずは山の湯の外観をスマホで撮りに来たのだった。

自転車を止める音を聞きつけて、白いブラウス姿の案内係らしい女性が出てきた。例によってマスクをしているが、脂の乗った若鮎わかぢみたいな女である。

「ここ、ビエンナーレ?」

「はい、そうです。どうぞどうぞ。チケットをお持ちですか」

持っていなかった。市内各地に点在する歴史的建造物の中で展示されるビエンナーレという芸術展は勤労感謝の日まで続く。私は山の湯の場所と外観を確認した後、時間のある時にゆっくり見て回ろうと考えていた。

「出たところの銀座街の文具店も会場で、そこで売っていますので」

「いずれ時間があるときに買うつもりですが、ちよつとだけ中の様子を見ることはできませんか」

「だめです」女はにべもなく言った。が、目は笑っている。「ここは芸術家さんの、言わ

ばいのちの場ですから、それなりの……」

「学生さん？」市内には滋賀大学経済学部や県立大学がある。学生ボランティアだろうと、まず思った。

「へへへ」と女は笑った。学生にしては年かさで、場慣れしている雰囲気があったので、「地元ボランティアの方？、どこかのお店若奥さん？」と、思い直して言ってみた。

商工会か何かの関係者、あるいは地元の有力者か責任者の娘さんあたりが、親に無理を言われて順繰りに出ていることもある。何せ催しは二ヶ月近く続く。

今度は「あはは」と笑った。「違うでしょ」と言わんばかりだ。

あ、そうか、市の職員かもしれない、通常業務の合間を見て借りだされている場合もあるに違いないと思い直して、確信を込めて「ああ、市の職員さん」と言った。

「フッフ」、含み笑いして、女はまた「だめです。買ってきてください」と言った。

「じゃあ、きょうは入口から中を眺めるだけにします。ちよつとだけならいいでしょ」

「ええー？、ちよつとだけでですよ」

よく笑う女だと思った。  
男湯に白い蝶の乱舞らしきものが見え、女湯にピンクのオブジェが並んでいそうなのを確認して、私はちよつとやってきた入場者と

入れ替わるように山の湯の玄関を出た。

女は新たな来訪者に対し、なめらかに口うまく対応し始めた。靴を脱いでいる婦人は言葉からして東海地方からの観光客のようだった。

私は軒下から外に出て、山の湯の外観を撮り、弁天宮を撮り、土塁の跡も収めた。

この銭湯は一年半前に廃業したということだが、そんなふうには見えなかった。

私の父方の祖父は篤実な小作農だった。農繁期には、小作地に加えて、地主の庄屋の田んぼにも作男さくおとことして出向いていたと聞く。祖父は日清戦争（明治二十七年〜二十八年、一八九四〜一八九五）前に生まれ、昭和四十一年（一九六六）に七十五歳で亡くなった。私は祖父の物故した歳まであと八年ある。

祖父はそれ以前に一度死にかかっている。昭和四十年（一九六五）、私は小学校六年生だった。学校から帰ってくると、祖父の枕元に急行させられ、「母親の言うことをよく聞くように」との遺言を神妙に聞いた。子ども心ながら、なんで自分の息子のことは言わないんだろうと不思議に思った記憶がある。

あわせて祖父の母も文句も言わず黙々と働く人だったんだろうなあと思った。祖父はそれからほとんど寝たきりの状態になったが、私

が中学に上がった年に息を引き取った。死に目には見えなかった。

私は次男の子だったが初孫であったので、近所に住む本家の祖父母から可愛がられ、祖父にはよくおぶってもらった記憶がある。

あの時は山の湯の入り口にはのれんが掛かっている、風に揺れていたはずだ。人を誘うのれんの手招きがあり、それを揺らす人の出入りがあつたはずだ。

ここへは祖父に連れられて来たことが一度あつたのだ。

小学校五年の時だった。「坊、えべすこ（多びす講）、行こか」と、祖父は彦根の町へ私を連れ出した。

ボンネットバスに乗って久左きゆうざの辻で降り、爺と孫が弥次喜多道中よろしく川原町銀座街から橋向はしむかい、登り町のぼりまち、市場街いちばがいと巡り歩き、最後はやはりまた銀座の人ごみのただ中にもどつた末、どこかで休もうということになった。

祖父は文房具店と洋服店の間の細道をくぐるようにすり抜けていく。抜けたところに山の湯があり、すぐ右手に祠を大きくしたような宮があつた。

祖父は宮の石段横に腰を下ろし、キセルを取り出し、刻み煙草の「桔梗ききょう」を吸い始めた。喧騒がうそのように引いていた。

祖父は自分の少年時代を振り返り始めた。

望遠鏡の先の先のような話だ。

「坊、おじいさんはなあ、お前くらいの人に、ここで女のの人に、体洗うてもろたことがあつてなあ」

祖父は山の湯の方を向いた。

カラコロと下駄の音を響かせ、のれんを払いのけて出てきた人があつた。

「ちよいと、坊や、こつちにおいでよ」

おこん（紺）さんと言う人やつてなあ、その人は。祖父はそう言った。

「坊や、きたないねえ。なんか匂うよ。えらく汚れてるじゃないかえ。洗ったげるから、中へおはいんな」

有無を言わず祖父は山の湯の中へ引き込まれた。

「体中、シャボンいっぱい付けてな、丁寧に洗うてくれはつてな、最後にな、こう言わつた」

「前は自分で洗いな」

祖父は自分の股間のあたりにふと目を落として、「あんなに固うなつてむずがゆうなつたことなかつたわ」と笑つた。

「坊や、あそこはね、誰に使つてもいいけど、相手を大事にするんだよ」、お紺さんはそう言つてざばざと掛け湯をしてくれた。

祖父はその時、その言葉の意味が何のこと

か分からなかつたらしい。当然だろう。

祖父たち村の百姓は、彦根の城下に下肥え買に行つていた。引き取り代金があつたとしても、それは少量の野菜だろうが、収穫を終え、寒肥かんごが必要となる晩秋が特にシーズンだったのだろうと私は思う。父も、肥え買いのリヤカーの先引きをさせられるのがとにかくいやだったと言つていた。集めた糞尿は村の野中の肥溜めに貯蔵される。町衆のそれが富栄養というわけでもなかつたと思うが。「川原町のめがね屋さんと懇意でな。そこへ行くとおとつあんはいつも長いこと話し込んでやつたんやがな」

祖父の話によると、祖父の父は例によつて長話に興じ、連れていった息子をほつたらかしにしていたそうだ。最初のうちは大人車たいはちくるまのそばでじつとしていたが、めがね屋さんの奥さんからもらつた飴玉も舐め切つてしまい、裏口だったが、大通りを行きかう人からも路地を通してじろじろ見られているような気がして、祖父は車を離れ、繁華な町中に飛び出していこうとした。その時、積み込みを待つばかりの肥え桶のひとつにぶつかり、ちゃぶんと桶は大きく傾き、その反動で肥え汁やその飛沫よけの藁束まで頬から首筋にかけてべつとり付着した。

祖父は恥ずかしいやら気持ち悪いやらで気が動転した。おのが不始末を父に告げに行つて、帰りを促してもよさそうなのに、どうしていいか分からず、しゃにむに手拭いで顔をひとけごしごし拭くや、そのまま通りを突つ切つて、人氣のない裏通りのここにやつてきてしまつたというのだ。

そうして外濠の土手のところをうろろしたあと、膝を抱えてじつとここに座つていたそうだ。すぐそばが山の湯だった。

銭湯は昼下がりに、夕刻前の暇な時間帯であつたらしい。そこに釜炊きの爺さんに何かを言ことづけにやつてきたお紺が現れたというわけだ。

「坊や、早くお脱ぎよ」

祖父は田舎ではまず見かけない、小綺麗な五十がらみのおばさんに見つめられて、地藏様状態になる。

「早くおしよ、手伝つてあげるからさ」

―東京から来た人やと思うた。江戸言葉でなあ。

祖父はトントンと雁首をたたき灰を捨て、二服目に火をつけた。

「あとから聞いた話やけど、やつぱり箱根の向こうの人で、ご先祖はどこやらのお武家さんで、維新のときに江戸に出てきはつたらしい。元がそういう出の女子おなごはんや。それがど

ういう事情があつたんかしらんが、東京から彦根まで流れてきやつたらしい」

祖父はそこまで言つたかどうか、記憶にない。ただ次の言葉は記録にある。

「風呂屋を経営してやあつた男はんと縁があつて、ほこの手伝いしてやあつたらしい。その男ちゆうんは、元は任侠、悪う言うたら極道やけんど、気持ちはまっすぐなもんや。」

その時祖父の言つた、気持ちの「まっすぐな」男は、以前は清水次郎長の兄弟分でもあり、関西一円でよく知られた侠客であつた。先にも述べたように、廓のあるじからキリスト教徒に身を変じた男、三谷岩吉と言つた。

私はこれから、祖父の思い出話をもとにお紺という女性について書いていこうと思う。

お紺は三谷岩吉とは切つても切れない関係にある（祖父の言つたことが、まるっきりの作り話でなければ、の話だが）女であるし、話の中に必然的に三谷岩吉も出てくるわけで、彼を描く際、実際の三谷岩吉からほど遠い人物になつてしまふかもしれない。

だから、岩吉を二谷鉄吉という架空の人物としておく。「お紺」は郷土に関する書物のどこにも登場しない名前なので、これはこのままにしておく。

さて、お紺、鉄吉の話に入る前に、その周

辺のことについて時代背景も含めて、三谷岩吉の人生を大きく転換させた中嶋宗達という人物について概略を述べておく。

宗達は伊吹山の麓、現米原市小田という所に生まれ、彦根藩奥医師中嶋家に乞われて養子となつた。神童だったのである。

明治元年（一八六八）にはへボン博士（ローム字で有名）に同行して北海道や樺太方面を周遊している。へボンからは西洋医学とキリスト教を学び、和漢洋の医学に通じた彼は明治五年（一八七二）に東京麹町で開業した。福沢諭吉からも助言を受け、民間医として活躍し始めた頃、養父の死去に伴い、故郷に帰ることになる。

彼は彦根の地で、同じく医師の樋口三郎らとともに、「明十社」（明治十年）をおこし、五番町の集会所「集義社」を会場に、衛生学とキリスト教を講じていくこととなる。

その後は同志社の関係者らとも交流し、医学と魂の救済の道を説き続け、多くの聴衆をここに集めた。機は明治十二年（一八七九）に熟し、六月、新島襄の手により十二名の者が受洗した。「彦根基督教会」の誕生である。

念願の教会堂は明治二十一年に四番町に建設されたが、現在、彦根教会の会堂内の木製看板には「彦根基督教會堂」という宗達の書が掲げられている。弱者救済の意志が込めら

れた力強い書きぶりである。

彼の功績を挙げれば、助産師の育成、彦根幼稚園の設立、彦根女学校の前身である淡海女学校、県立盲学校の前身である私立訓盲院の設立に協力、大津日赤の創立に寄与するなど枚挙にいとまがない。当時の県令からは初代医師会長に推されている。

その宗達から、岩吉は人生の歩み方を変える決定的な後押しを受けたと言える。岩吉は初代教会員十二名のうちに名を連ねている。

武士の家に生まれながら長年の素行不良がもとで、家と故郷から見放された二谷鉄吉は、当然のごとく出奔する。

やがて関西で名だたる博徒となり、慕い来る者の多くを子分にした。そんな彼に里心が付いたというのか、いっばしの大親分気取りで、ある日思い出したように駕籠に乗って家に帰ってきたのだった。

母親は鉄吉を見ると目に涙をいっばいため、「鉄！この馬鹿者が」と言つたきり、あとは言葉にならない。

―そんなときの話は知ってるよ。鉄吉さんが言つてた。紺は言う。風呂屋を始めたときさあ、二人で薪をくべてたときに言つてた。―でもさあ、さっきの話だけどね、坊やのじいさん、そんなこと言つてたのかえ。大ぼ



ら吹きとうへんぼくの唐変木だねえ。何が武士の血だい。笑わせるんじゃないよ。バカも休み休み言えつてもんだよ。あたしや黒船が浦賀にやって来た（嘉永六年、一八五三）頃の江戸生まれだけど、おっ母さんは深川の芸者だよ。芸者っていつても突っ伏し芸者だよ。近くに木場きばなんかもあって、あらくれもいたが、男には不自由しないよ。女ひとりなんとか生きていた。人づてに聞いたんだけど、父親ていおやらしき男は紺屋の職人、だから紺と名乗ってるんだよ。

鉄吉は焚き口で、燃えさかる炎を気持ちよさそうに目を細めて眺めている。眉目秀麗である。やがて彼は思い出したようにつぶやいた。

「なあ、お紺、もう、女子おなごはええわ、わいみたいな極道は女泣かしてばっかりや。一番泣かせたん、誰か知ってるか」  
「知りやあしねえよ、あんたが苦労かけた女なんか」

「ほうかあ。ほれはなあ、わいの母かかさんや。泣かしてばっかやったわ」  
「そりゃあ、よくないねえ」

「あたしも一緒だったから、なんだか、しみみわかってねえ。」

「深川芸者が貧乏職人とできちゃって、ほおずきはじ弾くのを失敗して生まれたのがあた

だからねえ。そんなつもりのない男は去っていくさ。物心ついたらテテなしを怨んで、親の言うことにいちいち逆らって、つい言っちゃあいけないことまで言っちゃうこともあらあね。そんな時あの女は「親に向かつて何言つてんだい、知るもんかい。相手が誰だかお前の知ったこっちゃねえよ」ってケツまくるんだよ。それがまた無性に腹が立って唾吐いたこともあったよ、ケツ。でもねえ、おっ母さんがいつも持ってたお守り、なんだと思う。あたいのへその緒だよ。いつもあたいの身を案じていたんだね。後で知った。

親に泣かれたくらいですぐに更正できるはずもなく、鉄吉は彦根に戻ったはいが、長浜、鳥居本、彦根の元締めとなり、やがて江州しゅうはもとより、縄張りを大垣、岐阜まで伸ばしていった。当時の警察も鉄吉親分と持ちつ持たれつの関係で、ヤクザ者の暴力沙汰など鉄吉の力を借りなければ手に負えないこともあった。

ある時、相手方と大乱闘になりそうな出入りの計画があつて、それを察知した警察署長みずから鉄吉に会いに来た。署長から「ここは忍の一字で辛抱してくれ」と頼み込まれ、鉄吉は署長の顔を立てるつもりでしぶしぶ矛を収めたのだが、後から漏れ聞こえてきた安

堵と感謝の町の声を知って、鉄吉の心が少し変わった。

もともと性根のやさしい男の磁針が極北に向き直り始めたのだから、それからは周囲の者があれよあれよと思う変わりようだった。

鉄吉は組を解散することを本気で考え始め、堅気になる決心をした。

人生の指針を求め出すと、どこかに光明が見えてくるものである。遊び友だちの以倉某がキリスト教信者になったことから、鉄吉は中嶋宗達らと知り合うようになった。宗達に接して、その教えを受けていくうちに、彼は世の光になることを真剣に考え、経営していた遊郭を廃業することにしたのだ。

「あんときゃあ、そりゃあ、驚いたよ。あたいは鉄吉さんのイロではなかったけど、可愛がつてもらっていたからねえ。十も上の男があたいをは姐あねさんみたいに頼っていたフシがあつてねえ、あたいに大事な相談持ちかけてくるんだよ。えへへ。」

鉄吉はすでに遊郭経営から離れることを決心していたが、そうは決めても、ことは自分ひとりだけに関わることではない。自分が抱えている娼妓はもちろん、雑役の男衆おとし、遣り手の婆さんなど、彼らの身の振り方を考えてから実行に移さねばならない。鉄吉はもはや、使用人をいきなり路頭に迷わせるようなこと

を平気でやってしまうような男ではなかった。

彼は娼妓を解放し、親元や故郷に返したり、結婚先を見つけてやったりした。そのように片付かない女には、遊郭以外の再就職先を見つけることに奔走し、ちょうど前年に操業を始めた平田の彦根製糸場の工女になるよう手はずを整え、みずから保証人となった。

しかし、男女を問わず若い者はどうにかなりそうだったが、問題は高齢の身寄りのない者たちの身の振り方である。

「お紺、おまはんはわいの言うことなんか聞かんやろうし、工女の訓練も受ける気ないやろ。ほやさかい、これから好きにしたらええ。でもな、権じいとかお辰みたいな婆さんや。あいつらはどこにも行くとこあらへん。そこでやな、風呂屋でも始めてそこで働いてもらお思うのやが、どやろ。土橋の外濠埋め立てたねきに、どうにも死んだる土地もあるし、あそこらへん買上げて作ってみよう思うのや。中嶋先生もそらええこつちや言うてなあ」

―それを聞いて、あたしもそりゃあいいことだって、すぐ賛成したよ。

―あたいは流れ流れの身でね、帰るところのない「売女渡世」の身だよ。岐阜にいたとき、鉄吉さんに拾われたあんばいでここに来たんだけどさあ、手に職なしの能なしだよ。だけ

ど、やっぱりもうね、体売る世過ぎはいやで

ね。女郎というのは舞妓や芸妓と違って、今風に言えば慰安婦だよ。男の慰み物、ハケ口さ。それにそんときゃあ、あたいは二十八だよ。器量も人並みで、娘盛りを過ぎた年増女は売れやしないのさ。東京に帰って、岡場所みたいところで夜鷹やったってみじめなもんだよ。だいいち体がもたないよ。男だつて金と暇持てあましてるババアや娘に体売つてみろつてんだ。食うために一日何人も、来る日も来る日もだよ、男は特に気を遣つちやあいけないしね、アハハ。とにかく重労働つてもんさ。それに……あたしや口が汚なくて客が閉口しちまうしね。だから風呂屋なら、釜焚きでも湯女でもやってみようかって思つてね。年寄りに交じつて働くのも悪くないと思つた。

「ほんでも湯女はあかんで」

「なんでだい、三助みたいなもんだよ」

「三助は男やがな」

鉄吉はとにかく正業にこだわった。経営する湯屋でそうしたことが行われなくても、やつぱりあいつは遊郭から離れられないのだ、などという噂が出ることを恐れた。

「背中流しのお紺でいくよ、鉄吉さん。年寄り湯手ぬぐい使つても背中洗えないよ。男湯でも女湯でも、中に入って背中流してやる

んだ」

―風呂屋と聞いて、あたいは昔、永代橋渡つて水天宮に連れて行かれた時のことを思い出してね。そう、あの情に流されつぽなしの不見転芸者にだよ。あの時はどうい風吹き回しだつたんだろ。七つのお祝いも兼ねてか知んないねえ。

そこで幼なじみの板木屋の理津ちゃんと千帆ちゃん姉妹に出会つてね。どうい風かみんなで湯屋へ行こうつてなつて、五人で（理津ちゃん千帆ちゃんはおばあちゃんと来てた）風呂行つてたら、あの二人、おばあちゃんの前中をぬか袋で一生懸命こすつてんだよ。それ見て、あたいは殊勝にも母ちゃんにもやつてあげなくてはいけないと思つたけど、もじもじして下向いてた。

そんなとき、おばあちゃんはどう言つた。「背中は手が届きやしないんだよ。そこはね、やつぱり他人様の手が必要なんだよ。人間てえものはときには誰かに助けてもらわないとだめなんだよ」……で、理津ちゃんと千帆ちゃんが、口をそろえて言つた。

「お紺ちゃんもおばあちゃんにやつておあげよ、鶴の一声みたいだった。

―もう一度言つとくけど、湯女つてつたつて、本当に年寄りの背中流すだけだよ。あたしやね、女郎やめてからは、転んだことは一

度もないからね。

それからお紺は山の湯に住み込んで、女三助から雑事いっさいをこなす存在になっていた。

鉄吉は宗達から提供してもらった熱海温泉の成分分析資料をもとに、薬湯作りに腐心した。伊吹山の麓に向いて、薬草についての知識を教えてもらったりもした。また、資金面を中心に風呂屋の経営にも熱心に取り組み始めた。

そういう新しい仕事に携わりながらも、鉄吉はひたすら信仰の道に進んでいくのだった。ほとんど寝食を忘れて人のために尽くす道に進んでいくのだった。

のちに当時としては目新しい牛乳屋を営み、教会の事業に大きく貢献することになる、友人沖太郎を辛抱強く導いていったのも鉄吉だった。

沖太郎は大変な酒豪だった。ほとんど酒で身を持ち崩していた男だった。まっとうな職にもつかず酒におぼれる彼を、鉄吉は信者の集会に誘い続けた。

維新後、足輕の身でいられなくなり、新しい職を見つげようと必死になっていた頃の沖太郎を知っていたからだ。彼に救いの手を差し伸べれば、やがてはこっちの手が引く張られるほど信仰に突き進むに違いないと、

人を見抜く目が肥えていた鉄吉はそう思っていた。彼は信じていた。

「おい、沖太郎、行こか。これから集まりや」「うん、ちよつと待ってくれ。もう一杯飲むさかい、さき行ってくだい」

「行ってくだいで、て、なんや。人を乞食みたいに言うない。ほんなに飲んだらあかんほん。……ほな、待てるさけ、ゆっくりやりや」

沖太郎は酔いつぶれて正体不明の状態になつていても、集会が終わりかけになつていても、必ず顔を出した。

鉄吉は慈善の精神にもあふれ、米価が高騰し、食うに困った町内の人々に、一日三合の米を相場の半分で売ってやった。貧窮者の生活費としてひとり十銭を給してやったりしたこともあった。

「どうせ博打の胴元やら廓くわくわやらで稼いだ金やがな。汚ない金や」というさがない陰口も聞こえてきたことがあったが、彼は気にしないですまそうとした。ここで怒れば男が廢すたる。もう博徒の元締めでも女郎屋のあるじでもないのだ。

それでもたまに弱気になる。

「お紺、お前『へそこ』で、知ってるか」

「知んねえよ、なんのこつたい」

「へそこいうたらなあ、できそこないのこつちや。まあ、不良品や。わいのこつちやがいな。

兄弟の中でも生まれつき、とびっきりのできそこないで、悪さばかりしてきたわ」

「今はそうじゃないんだから、あんまり気にするこたア、ないよ」

「鉄吉さんは自分が今やってることは罪滅ぼしだなんてよく言ってたけど、そんなに罪イ滅ぼしちゃうあ生きていけないよって言ってた。そりやあねえ、あた人も人間でものはできるだけ罪を作らない方がいいとは思うけどね、この世に生まれてきたことからして罪な存在だと思ふんだ、うまく言えないけど。ま、あの人の、単純に、そんなふうと思つて馬車馬みたいに働けるところが好きだったんだだけさ。」

「あの、四ヶ月前、蛍を見た。二人で芹川せりがわ堤に腰を下ろして蛍を見ていたことがあったんだよ。」

「ええもんやなあ」

感に堪えないように、鉄吉が蛍から目を離さずに言う。

「いいものだねえ」

山の湯をしまつてからのことで、遅い時間になつていたので群舞というものではなかったが、それでも数頭が飛び交つていた。どこかのご隠居の、謡いのおさらいの声も消えていた。

「八代直惟公の時、木導つちゆう藩士がいやはつてな。仲間と蛍狩りに行かあった時の句に、風呂屋より直に見に行蛍かな、というのがあるんや。ほかにも苗塚の蛍とかな」  
「田植えもうじぎだろうしねえ。夜風もほんのちよつとあつて、いいあんばいだよ」

「……なんか、ほんまやなあ」

鉄吉は背筋を伸ばした。蛍はゆっくり揺れている。

「けど、空の鳥は鳴きよるのに、蛍は光つとるだけやな」

「何言ってるんだい」紺は鉄吉を見た。

「ほれになあ、蛍は、やっぱり大勢で見るもん、違うなあ」

紺は前を向いた。

「見世物じゃないしねえ……ひとりがいいかい？」

「いや、お紺」

「なんだい？」

「どや、いっしょにならへんか」

「……馬鹿言ってるんじゃないよ」

紺は上を向いた。ついと蛍がにじんで消えた。鉄吉に向き直れなかった。鉄吉は前を向いたまま「そうかあ」と言った。  
「夜の更るほど大きなほたる哉、というのもあるんや。連れの汶村ちゆう人の句や」  
「……真打ち登場ってどこかい」

「うまいこと言うなあ」

「鉄吉さん、そうなるよ、きつと」

「ほんでも、この頃なあ、……人の目にとまらんでもええんや、思うんや」

すべては順風満帆のように思えた。白帆は大きく腹をせり出して、遅疑なく寄港地に向かっていくように思えた。

だが、神に召された三十八歳の鉄吉を送り出す秋の日は、とんでもない悪天候だった。受洗からまだ二年もたつていなかった。

朝から暴風雨に見舞われ、とても葬儀は出せないように思われた。前夜からの生温い風は明け方から大粒の雨の瀑布となっていた。

元武家として檀那寺との関係もあったが、鉄吉の遺志もあつて葬儀はキリスト教式で行い、関係者だけでごく内輪で済ますつもりだった。それでもその日にできるかどうか案じられた。この天候では出棺は一日見合わせざるを得ないのではないかという危惧もあった。

しかし鉄吉危篤の報を聞きつけて、彦根に駆けつけていた力士たちが押し切った。京都相撲の小結「磯浪」が逢坂山から、萱野神社宮相撲の「新駒」が瀬田から、水口からはこれも京都相撲で活躍した「柳風」が来ていた。海津天神社の奉納相撲で名を売って

いた「錦山」が、これは事後に自殺行為だと厳しく叱責されたが、長浜まで舟を漕いで彦根に到着していたのだった。

彼らの宿を一手に引き受けたのは芹町の力士「勇鉄」忠五郎である。

力士たちは神社などでの奉納相撲や、各地で勧進相撲や草相撲の興行を行った際、それを仕切り勧進元となっていた鉄吉から多大な恩義を受けた大男たちであった。鉄吉は彼らに関蟬丸神社お墨付きの「辻角力」の免状も与えていた。

彼らは「鉄吉親分は、こうと決めちゃあ、時を待つような人ではございませんでした。わしらが無事葬儀ができるよう、建物の壁支えでも、棺担ぎでも、嵐をついての移送でも何でもやりましょう」と口をそろえて言った。

こうして、とにもかくにも決行することになった葬儀会場（集義社）の中を、物珍しさから無遠慮に覗き込んでいく者もあった。初めて見る大きな十字架だった。

雨風について運び込まれたオルガンが荘重な響きを奏でた。葬儀開始の合図である。奏者は宗達の息女だった。

このオルガンは鉄吉が世話人となり、来日中の宣教師ゲーリックが米国商社と購入の折衝に当たった、彦根で最初のオルガンだった。オルガンの音が鳴り響く中、扉がガラガラ



と大きな音を立てた。嵐に押されておぼろしく入り込んできたのは山の湯の常連たちだった。みな黒の羽織りで、数珠を手にしていった。牧師が聖書を朗読している最中に、鉄吉の店にいた元娼妓の女たちが静かに入ってきて、すぐ泣いた。讚美歌の時に、遅れてきたひとりの博徒がはあはあ言って入ってきて、ぺこぺこ頭を下げた。

式は最後の祈祷となった。

オルガン演奏の終了を待っていたかのように、台風目が開き、外の嵐はぴたりと静まり、ぽっかり青空が見えた。

「あれはまるで、昔、江戸の芝居小屋で見た團十郎の「鳴神」だったね。あたいが「雲の絶え間姫」で、お紺童貞だった鉄吉さんへの最後のふるまいを、神様がなさってください」と思っているよ。あはは、だ。鳴神の鉄吉さん、おれを酔わせて雨降らしやがったって怒って、このお紺を追い回しに起き上がってくるんじゃないかい。

「どうして急に死んだんだ、ってかい？ そんな時になんで笑っていられるのかだって？」

「野暮つてもんだよ、そんなことを聞くのは。誰にでもね、言いたくないこと、知られたくないことってのはあるもんだよ。泣いて泣いて、ひたすら泣いた後には、笑うしかないってこともこの世にあるのさ。」

「あははと笑う。真宗の坊さんだって、日蓮宗だって、耶蘇のお坊さんだって、説教してる時に笑ってるところは見たことないじゃないか。神主さんだって笑いながら祝詞あげるって聞いたことない。そうだろ。……でも、あたいは死にそうに悲しくてつらい時なんか、あははと笑うことにしているのさ。」

雲の絶え間は、いつとまのことで、また南の空から分厚い灰色の雲が押し寄せ、ぬるい風がだしぬけに渦巻き始め、やがて木々を押し倒さんばかりに荒れ狂った。空はしばらく咆哮し続けた。雨滴を横から吹きつけた。とにかくひどい天気だった。

鉄吉が仏様を捨てたので、仏罰が当たったのだと言う人もあった。

「それを仏罰というのなら、仏っていうものは小せえもんになっちゃうよ。」

ビエンナーレも残すところあと一週間となった日曜日、私は最後に取っておいた山の湯の会場を訪れた。

中から花やいだ声が聞こえてくる。この日も穏やかな天候に恵まれてまずまずの盛況らしかった。女湯の方から入った。

入場者と話しているらしい澄んだ声が右肩の方から舞い下りてくるので、ふと見上げたら、あの女がどっかりと番台に座ってこちら

を見下ろしていた。この日はベージュのセーターだった。二手から入り来る客をさばくのだから、真ん中の番台にいるのは合理的で銭湯気分も出るが、主みたいに思えた。

「あらア、いらっしやいませ」

「おお、またいますね」

「あはは」と笑って「チケットは」と聞いてきた。

女は私が差し出したカードにチェックを入れた。

「中はイケイケですよ」

「あはは、はい。ビヨンド・ジェンダーで」

そのまま脱衣場にある展示物を観に行こうと歩き出したら、女は「あ、よろしければお名前をお書きください」と備え付けの用紙を指さした。

私は少し迷ったが、二谷鉄吉と書いた。

(了)

(評)

BIWAKOビエンナーレ会場の一つである銭湯「山の湯」設立者の三谷岩吉と架空の娼妓お紺との秘話である。彦根ゆかりの実在の人物を取り上げ史実に依りながら巧妙に創作し、読み応えある力作に仕上げた筆力は高く評価される。

## 《総評》

今回は一作だけの応募でしたが、読み応え満載の力作でした。あえて課題を挙げるとすれば、語り部の多重構造です。話は現代から始まり、よくあるパターンで「私」の回想へと展開。少年時代に戻り祖父との思い出話が軸になるかと思いきや、その祖父が少年に戻りお紺と出会う。ああこれが「山の湯の女」だ、祖父とお紺の話やったんやと納得する読者を尻目に、今度はお紺によって三谷岩吉なる実在の人物が語られる。史伝かと思わせて、架空の人物「二谷鉄吉」の話だと読者は釘を刺される、岩吉まで「架空化」する必要はありません。創作だから小説なのです。自由な発想で創りましょう。実在の藩医「中嶋宗達」が登場するのに作中、鉄吉とのからみが描かれない。何かと課題は残るのに読まされてしまうのは作者の筆力です。すっきりするならクライマックスにふさわしい大事件をまず設定してその山を登っていくストーリー展開にすればシンプルにまとまります。でも型にはまり過ぎて面白さは失わないでくださいね。十分面白いですから。

井上 次雄

